

# 天草方言で詠む 【新古今和歌集】

鶴田 功〈訳文〉

「新古今和歌集」は、鎌倉時代初期1201年（建仁元年）～1210年（承元4年）後鳥羽上皇の勅命によって編まれた勅撰和歌集である。

恋歌を抜粋して天草方言で意識しています。

## 卷第十一（恋歌一）

0990 よそにのみ 見てややみなむ <sup>かつらぎ</sup>葛城や 高間の山の 嶺の白雲 詠み人不詳  
ただ他人ごとで 高嶺の花ンごと 眺むるだけじゃろかい  
あん葛城の高っか金剛山にかかる白雲ンごたる 高貴で美しか貴方を

0992 <sup>あしびき</sup>足曳の <sup>かひ</sup>山田もる庵に おく蚊火の 下こがれつつ 我が恋ふらくは 人磨  
山田を守る小屋にある蚊遣りの草が くすぶっとるごと  
私は心ン中で人知れず 恋い焦がれとっとヨ

※「<sup>あしびき</sup>足曳の」は、「山」に掛かる枕詞

※ <sup>まくらことば</sup>枕詞とは、主として和歌に見られる修辞で、特定の語の前に置いて語調を整えたり情緒を添えることばのこと

0993 <sup>いそのかみ</sup>石上 <sup>ふる</sup>布留のわさ田の ほには出です 心のうちに 恋ひや渡らん 不詳  
石上の布留の早稲田でン 梅雨の間は穂が出んごと  
表にゃ出さんで 心の中で あなたを恋しゅう思うとっと

※「石上」は、「布留・古・降る」に掛かる枕詞

0994 春日野の 若紫の すり衣 しのぶの乱れ かぎりしられず 在原業平朝臣  
春日野の若紫で摺った衣のごたる 美しかあなたを拝見して  
こん信夫縵摺の衣ンごと 忍心でひどう乱れとっとヨ

※「信夫」と「忍ぶ」の掛詞

※ <sup>かけことば</sup>掛詞とは、同じ音、あるいは類似音のことばに、二つ以上の意味を込めて表現する方法

0995 紫の 色にこころは あらねども 深くぞ人を おもひそめつ 延喜御歌  
私の心は紫じゃなかばって まって紫根が衣を染むるごと あなたを  
深く思うとっとヨ

0996 みかの原 わきて流るる 泉川 いつ見きとてか 恋しかるらん 中納言兼輔  
みかの原から湧き出て泉川になるごと いつ見た時から  
こがん あなたを恋しゅうなっただっじゃろかい

※「泉」と「いつ見」の掛詞

0997 園原や ふせ屋におふる <sup>ははきぎ</sup>帚木の ありとはみえて 逢はぬ君かな 坂上是則  
園原の伏屋に生えとる<sup>ははきぎ</sup>帚木は 遠くからなるわかるばって  
近くからにゃどけあるかわからんごとなる  
こん帚木のごて 会いに行たっちゃ なかなか逢うてくれんとね あんたは

- 0999 年月は わが身に添へて 過ぎぬれど 思ふ心の ゆかずもあるかな 西宮前左大臣  
あなたへの思いを抱えたまま 長い年月が過ぎてしもたばって  
今まで打ち明けることもできんじゃった
- 1000 諸共に 哀といはずは 人知れぬ 問はずがたりを われのみやせむ 大納言俊賢母  
お互い一緒の想いであると あなたが打ち明けてくれんば  
私は人知れず独り言を言うて 暮らすところじゃった
- 1001 人づてに しらせてしかな <sup>かくれぬま</sup> 隠沼の みごもりにのみ 恋ひや渡らん 中納言朝忠  
人バ介しても 私の秘めた思いを伝えたかネ 一面草に覆われとる  
沼の水の中に隠れたごたる恋が このまま続くとじゃろかい
- 1003 から衣 袖に人めは つつめども こぼるる物は 涙なりけり 謙徳公  
衣ン袖に私の恋心は 人目につかんで隠しとるばって  
隠しきれんとは あんたを思って流す涙ヨ  
※「唐衣」は、「袖・着る」に掛かる枕詞
- 1005 あら玉の 年にまかせて 見るよりは われこそ越えめ 逢坂の関 謙徳公  
年月の流れに任せて あなたにお逢いできっとを待つよりも  
私があ逢坂の関を越えるごと 障害を乗り越えて逢いに行くけん  
※「新玉の」は、「年・月・日」に掛かる枕詞
- 1006 我が宿は そことも何か 教ふべき いはでこそ見め 尋ねけりやと 本院侍従  
私の実家はここばいと 何で教えてさしあぎゅうきゃ 何も言わでにゃ  
私の家を探し出したかどうかを 見ることにしゅう 本気じゃいろ
- 1007 わが思ひ 空のけぶりとなりぬれば 雲井ながらも なほ尋ねてむ 忠義公  
私の燃え上がった思いは 既に空の煙となつとるけん  
例え遠か雲の向こう(宮中) じゃったっちゃ 訪ねて参りましょうだ  
※「堀河関白」・「忠義公」は、藤原兼通
- 1010 風吹けば <sup>むる やしま</sup> 室の八島の 夕煙 こころの空に たちにけるかな 藤原惟成  
風が吹くと室の八島にたちこむる夕霧(煙)も 空に立っていくごと  
私の心も夕暮になれば あなたへの思いも 立ちこめてくつとた
- 1011 白雲の みねにしもなど 通ふらむ 同じみかさの 山のふもと 藤原義隆  
どい近衛府の上司ばかり心をかけて 下官の私にゃ とんじゃくなかとネ
- 1013 つくば山 <sup>はやま</sup> 端山繁山 しげけれど 思ひ入るには さはらざりけり 源重之  
筑波山の周りン里山や 端山が 茂つとるごと 障害は多かばって  
歌垣の場所さん あなたに会いに行く決心をした私にゃ 障害にゃならんと

- 1014 われならむ 人に心をつくば山 したに通はむ 道だにやなき 大中臣能宣朝臣  
私じゃか人に あなたは心を尽くしとる（筑波山）  
その人にわからんごと 通うこともできんとネ
- 1017 幾かへり 咲き散る花を 眺めつつ もの思ひ暮らす 春に逢ふらむ 大中臣能宣朝臣  
何年も咲いて散る花ば眺めながら またあなたのことで  
物思いに耽りながら 暮らす春を 今年も経験すつとじゃろかい
- 1020 春風の 吹くにもまさる なみだかな わがみなかみも 氷解くら 謙徳公  
春風が吹くよりも 私の涙が勝つとる どうやらこん涙の水源でにゃ  
春雨に加え 凍つとった思いが 溶け出したっじゃろう
- 1021 水の上に 浮きたる鳥の あともなく おぼつかなさを 思ふ頃かな 謙徳公  
水の上に浮いとる水鳥の 足跡を残さんごと 返事もくれでにゃ  
不安に思うとる 今日この頃ですばい
- 1025 秋萩の 枝もとををに おく露の 今朝消えぬとも 色に出でめや 中納言家持  
秋萩の枝もたわむごと 溜まった露が朝になれば消えるごと  
私も溜まった涙で 死んでしもうたっちゃ あなたへの想いは表には表さんヨ
- 1026 秋風に みだれてものは 思へども 萩の下葉の 色はかはらず 藤原高光  
秋風に萩が乱れるごと あなたへの思いで 心が乱れとるばって  
下葉の色がまだ黄葉せんごと 顔には出さんとヨ
- 1027 わが戀も 今は色にや 出でなまし 軒のしのぶも 紅葉しにけり 花園左大臣  
私の恋は今に 表にきつと出てしまうどだ  
軒下の堪え忍ぶの名の忍草も 色も変わつとるけん
- 1028 いそのかみ ふるの神杉 ふりぬれど 色には出でず 露も時雨も 攝政太政大臣  
いそのかみ布留の（古か）神杉は 長う経ったばって  
露や時雨が降っても 色が変わらんごと 私の長い忍恋も 色に出るこたなか  
※「石上」は、「布留・古・降る」に掛かる枕詞
- 1029 我が恋は 槇の下葉に もる時雨 ぬるとも袖の 色に出でめや 太上天皇  
私の恋は 槇の下葉から 漏るる時雨に袖が濡れても 色が変わらんごと  
例えあなたと寝たとしても 他に知られることはなか
- 1030 我が恋は 松を時雨の 染めかねて 真葛が原に 風さわぐなり 前大僧正慈円  
私の恋は 時雨が幾ら降っても 松が紅葉せんごと あの人が私になびかんけん  
葛の原が風に騒いで 裏葉を見せとるごと 恨んでばかりおつと
- 1031 うつせみの 鳴くねやよそに もりの露 ほしあへぬ袖を 人のとふまで 攝政太政大臣  
蝉の鳴く声が森の外に漏れんごと 現実の私もあなたへの想いで

忍泣きしとるばって つい泣いてしもうて袖が乾かんで  
人がどがんだんねと 問うまでになつてしもた

※「うつせみの」は、「人・身・命・世」に掛かる枕詞

- 1032 思ひあれば 袖に蛩を つつみても 言はばや物を とふ人はなし 寂蓮法師  
あの人への思いがあるなら 桂の皇女に仕えた童女のごて  
蛩を袖に入れて私の思いを伝えたかばって 袖もせんとあの人  
私がこがん苦しんどることも知らでにゃ 聞いてもくれんどだ
- 1033 思ひつつ 経にける年の かひやなき ただあらましの 夕暮の空 太上天皇  
あなたを思い続けて どうしよんなか年を取つてしもた ただ何となく  
あなたに会える予感がただけで 会うこともなか  
夕暮れン空は なんさまもの悲しく見ゆる
- 1034 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることの 弱りもぞする 式子内親王  
私の命が終わるなら 今直ぐ終わつて欲しか あなたへの忍恋を  
秘めとることが できそうにもなかけん
- 1035 忘れては うち歎かるる タベかな 我のみ知りて 過ぐる月日を  
相手は知らん 秘めた忍恋じゃって ついそれを忘れて  
あなたが来んことを 嘆きよつた
- 1036 我が恋は する人もなし せく床の 涙もらすな 黄楊のを枕<sup>つげ</sup>  
私の恋は誰も知らんけん 私が夜 布団の中で泣いとる涙を  
黄楊の枕よ 漏らさんでくれ 人に知られんごて
- 1037 忍ぶるに 心のひまは なけれども 猶もる物は 涙なりけり 入道前関白太政大臣  
忍ぶ恋に心の余裕はなかばって 隠せば隠すほど 漏れてくつとは涙たあ
- 1038 つらけれど 恨みんとはた 思ほえず なほ行くさきを たのむ心に 謙徳公  
あなたはいつもつれなかばって 恨もうとは思わん いつか時期が来れば  
私に心を許してくれると 期待しとるけん
- 1040 風吹けば とはに波こす 磯なれや わがころも 手の乾く時なき 紀貫之  
私の衣の袖は ちょうど風が吹いて 永遠に波が飛んでくる岩のごて  
いつも涙で濡れとつと
- 1044 さみだれは そらおぼれする 時鳥 ときになく音は 人もとがめず 馬内侍  
五月雨の頃 そらとぼけて 時間かまわす鳴くのが時鳥たあ  
そがん気まぐれに 突拍子ものう鳴く声を 誰が気に止むっどか  
ましてや あなたの気まぐれの言葉なんの
- 1045 時鳥 こゑをば聞けど 花の枝に まだふみなれぬ ものをこそ思へ 法成寺入道

ホトトギスの初音は聞いたっばって まだ卯の花の枝に止まり慣れとらんごて  
私の文を贈っとも 慣れとらんとば 思いやってくれネ

1046 時鳥 しのぶるものを かしは木の もりても聲の 聞えけるかな 馬内侍  
四月のホトトギスは まだ声を忍ばせて鳴いとったっば  
柏木の森で 漏れ聞こえてしもたっじゃろかい

1048 みくまのの 浦より遠<sup>おち</sup>に 漕ぐ舟の 我をばよそに 隔てつるかな 伊勢  
熊野の浦から遠くへ漕ぎ出す舟のごて 私との関係も離れてしもたとネ

1049 難波潟 みじかき蘆の ふしのまも あはで此の世を 過ぐしてよとや  
難波潟の短い葦の節の間のごたる 短か間も逢わんで 過ごせちゅうとネ  
今の私にやできそうもなかヨ

1050 みかりする 狩場の小野の 檜柴の なれはまさらで 恋ぞまされる 人麿  
御狩する帝の狩場の 野にある檜の枝ではなかばって  
なかなか逢いに行くことはままならん 恋の思いだけは日毎に増してくる

1052 東路の 道の果なる 常陸帯の かごとばかりも 逢はむとぞ思ふ  
東路の道の果てにある鹿島神宮の縁結び占いの 常陸帯の締め金じゃなかばって  
少しでん 神様のご加護があるなら逢いたかネ

1061 いかにせむ くめぢの橋の 中空に 渡しも果てぬ 身とやなりなむ 藤原實方朝臣  
どがんすればよかと 一言主神が架けることんできんじゃった  
久米路の橋のごて 私の想いも中途半端に終わって  
遂げることができんごて なっとじゃろかい

1064 わが戀は ありその海の 風をいたみ 頻りによする 波のまもなし 伊勢  
私の恋は 有磯の海に風が激しゅう吹いとるけん 寄する波が  
休む間も無かごて 激しゅう乱れとる

1072 追風に 八重の鹽路を 行く舟の ほのかにだにも あひ見てしがな 權中納言師時  
追い風に幾重にも重なった波を越えて行く舟ンごて  
急いで行くけん いっときっちゃ あなたに会いたか

1078 蟹のかる みるめをなみに まがへつつ 名草の濱を 尋ねわびぬる 皇太后宮大夫俊成  
すてきな女性に会うたばって 名前バ聞きそびれて二度と会われん  
見失うて名前を聞かじゃったことが悔やまるる

1080 みるめ刈る かたやいづくぞ 棹さして われに教へよ 海人の釣舟 在原業平朝臣  
海松を刈る潟 あの方にお会いできる所はどこでじゃいろ  
棹差して(案内して) 私に教えてくだっせ 釣舟の海人

## 卷第十二（恋歌二）

- 1081 下もえに 思ひ消えなん 煙だに 跡なき雲の はてぞ悲しき 皇太后宮大夫俊成女  
このままでは心に秘めたまま 思い焦がれて死んでしまうどだ  
煙となって跡も残らず 雲に紛れてしまう身を思えば悲しか
- 1082 なびかじな 海士の藻塩火 たきそめて 煙は空に くゆりわぶとも 藤原定家朝臣  
海士の藻塩の焚き火の煙で涙が出てしまう  
空に昇っていかでにゃ 燻っとる煙ンごて 私の想いも叶わでにゃおる
- 1084 みるめこそ 入りぬる磯の 草ならめ 袖さへ浪の 下に朽ちぬる 二条院讃岐  
海松布は満潮になれば波の下に隠れてしまう磯草じゃろう  
あの人に逢えんばかりか 波ンごたる涙に沈んで 袖が朽ちてしもた
- 1087 もらすなよ 雲井の嶺の 初時雨 木の葉は下に 色かはるとも 摂政太政大臣  
峰にいる雲よい 私の忍ぶ想いを 漏らさんでくれ  
たとえ初時雨で 木の葉の下が 紅葉したっちゃ
- 1091 人知れぬ 戀にわが身は 沈めども みるめに浮くは 涙なりけり 花園左大臣  
人に知られん恋に 私は沈んだらばって  
あの人に逢えば 浮かんでくっとは 涙じゃっかネ
- 1095 限あれば しのぶの山の ふもとにも 落葉がうへの 露ぞいろづく 左衛門督通光  
物には限度がある 信夫山ン麓の 落ち葉の上の露が 紅く色づくごて  
忍恋に流す涙も 紅う染まってしもた
- 1096 うちへて くるしきものは 人目のみ しのぶの浦の あまの栲縄  
長う続いて苦しかとは 信夫の浦の海人が繰る栲縄のごて 人目忍んだ恋じゃ
- 1099 はるかなる 岩のはざまに 独りみて 人目おもはで 物思はばや 西行法師  
遠く人里に離れた岩の間に独りでおって  
人目を気にせんで あの人を思って 涙を流したかもんじゃ
- 1101 草ふかき 夏野わけ行く さを鹿の 音をこそ立てね 露ぞこぼるる 攝政太政大臣  
草深い夏野を分けて行く牡鹿は声を出さんばって 露が零れるけん分かるごて  
私の忍ぶ恋も声に出して泣かんちゃ つい涙が零れ落ちるけん バれてしまう
- 1102 後の世を なげく涙と いひなして しばりやせまし 墨染のそで 大宰大貳重家  
後生を嘆く涙を流していますち言うて あなたへの忍ぶ恋を誤魔化して  
出家して 黒染めの袖に溜まった涙を しばるこてします
- 1103 たまづさの 通ふばかりに 慰めて 後の世までの うらみのこすな

お手紙だけのやりとりはしますけん それで気持ちを和らげて  
後世まで恨みを残すなどせんでください

- 1104 **ためしあれば ながめはそれと 知りながら 覺束なきは 心なりけり**  
例があるごて あなた様が恋で物思いに耽っとられるのはわかりますばって  
気がかりなのは それが誰に恋しているのか あなた様の心がわかりません
- 1105 **いはぬより 心や行きて しるべする ながむる方を 人の問ふまで** 前大納言隆房  
口に出して言う前から心があの人の方へ行って 案内しとったとでしょう  
ぼんやりあの方のいる方を眺めとったっば  
あなたが「誰に恋しとつと」と問うまでは 気付かんじゃったとよ
- 1107 **思ひあまり そなたの空を ながむれば 霞を分けて 春雨ぞ降る** 皇太后宮大夫俊成  
恋の思いに耐えかねて 涙ながらに あなたの居る方角を眺めとれば  
私の心んごて 立ちこめた霞を分けて 春雨が降りよる
- 1108 **山がつの 麻のさ衣を さをあらみ あはで月日や すぎ萱けるいほ** 攝政太政大臣  
山里に住む身分の低い者の 麻衣ン箆の目が 粗うして合わんごて  
あなたと逢わないまま月日を この杉で萱いた庵で過ごしてゆくちゃろかい
- 1110 **逢ふことは かた野の里の ささの庵 しのに霧散る 夜はの床かな** 皇太后宮大夫俊成  
あの人に逢うことは難しか 交野の里の笹萱の 庵の篠じゃなかばって  
ひとり寝の寂しさで しきりと涙が落ちてくる 夜の床じゃなあ
- 1111 **ちらすなよ 篠の葉草の かりにても 露かかるべき 袖のうへかは** 皇太后宮大夫俊成  
露を散らさんで 篠の草葉を刈ったとしても  
露が袖に落ちて 人に忍恋の涙と思われるけん
- 1112 **白玉か 露かと問はむ 人もがな ものおもふ袖を さして答へむ** 藤原元眞  
白玉か露かと昔の人は聞いたごて その様に聞いてくれる人がいて欲しか  
そうすれば私の袖を指して あなたを想う嘆きの涙ヨと 答ゆうだ
- 1113 **いつまでの 命も知らぬ 世の中に つらき歎の やまずもあるかな** 藤原義孝  
いつまで生きられるかわからんとに 辛い恋の嘆きが止まん あなたの為に
- 1115 **いつとなく 鹽焼く海士の とまびさし 久しくなりぬ 逢はぬ思は** 藤原基輔朝臣  
いつからという訳でもなかばって 塩焼く海士の苫屋の庇のごて  
久しく逢えない 想いの火でくすぶり続けとります
- 1116 **藻塩やく 海士の磯屋の 夕煙たつ 名もくるし 思ひたえなで** 藤原秀能  
塩作りする海士の磯屋に夕方の煙が立つごて あなたとの恋の噂が立って  
苦しく思うばって その煙のごて 私の想いが絶えないで欲しか

- 1118 ありとても 逢はぬためしの 名取川 朽ちだにはてね 瀬々の埋れ木 寂蓮法師  
女性から逢わせてもらえんごてなる男の 例のごて  
評判取る（名取り）ごたれば 名取川の埋れ木のごて 朽ち果ててしまえ
- 1121 よそながら あやしとだにも 思へかし 恋せぬ人の 袖の色かは 高松院右衛門佐  
せめて他人事でっちゃよかけん 私の様子がおかしかと感じてください  
あなたへの思いの涙で 袖の色が紅く染まっとるけん
- 1124 夢にても 見ゆらむものを 歎きつつ うちぬる宵の 袖のけしきは 式子内親王  
夢でも会えんことを嘆いて 寝とる宵の袖の様子は 涙で濡れとっとヨ
- 1127 夢のうちに 逢ふと見えつる 寝覺こそ つれなきよりも 袖は濡れけれ 大納言實宗  
夢でしか あなたに逢うことができんと分かった寝覚めの方が  
あなたからつれない対応を受けた時よりも 涙で袖が濡れとるヨ
- 1131 逢ふ事は いつといぶきの 嶺に生ふる さしも絶えせぬ 思なりけり 中宮大夫家房  
あの人に逢えるのはいつの日かと言う（伊吹）のは わからんばって  
私の燃える想いは少しでも（さしも草）絶えることなく 恋い焦がれとる
- 1132 ふじの嶺の 煙もなほぞ 立ちのぼる うへなき物は 思ひなりけり 藤原家隆朝臣  
富士山の煙も 高い峯のさらに上に 昇っていく  
その煙よりも上に昇っていくとは あなたへの想いが恋い焦がれて燃やす煙ばい
- 1134 逢ふことの むなしき空の 浮雲は 身を知る雨の たよりなりけり 惟明親王  
あの人に逢うことは絶えて 虚空を漂う浮き雲が  
我が身の憂さを知って 涙を流すきっかけの 雨を降らそうとしとる
- 1138 つれなさの たぐひまでやは つらからめ 月をもめでし 有明の空 藤原有家朝臣  
別れる時のあの人をつれない態度んごて 別れをつらく思わんごて見ゆる月  
私はその有明の空の月まで これから愛でることはせんどだ
- 1141 いく夜われ 浪にしをれて 貴舟川 袖に玉ちる 物思ふらん 摂政太政大臣  
私は幾夜 波に濡れながら貴船川を上ってくるごて  
袖の涙が玉のごて散ってしまうほど 物思いに耽とっとじゃろかい
- 1142 年もへぬ 祈る契りは 初瀬山 尾上の鐘の よその夕暮 定家朝臣  
初瀬の観音に あの人との恋を祈って 何年もたってもた  
尾上の鐘も私の為じゃか 誰か他の人との恋を祝うて夕暮れに鳴らしよるナ
- 1145 あす知らぬ 命をぞ思ふ おのづから あらば逢ふ 世を待つにつけても 殷富門院大輔  
明日はどうなるかわからん命も ひょっとして生きとれば  
又お越しいただけるかもしれんと思つて 生きとりますばい

1147 何となく さすがにをしき 命かな あり経ば人や 思ひ知るとて 西行法師  
何時死んでもよかと思うばって 何となくさすがに命が惜しくなる  
生きとれば あのへへの思いが 伝わることもあつとじゃけん

### 卷第十三（恋歌三）

1149 忘れじの 行末までは かたければ 今日をかぎりの 命ともがな 儀同三司母  
あなたが 私を忘れず一生大事にしますという 今の言葉は信用がでけんけん  
いっそ今日死んでしもうて あなたが 嘘の罪を被らんとてしたかと

1150 限なく 結びおきつる 草まくら いつこのたびを おもひ忘れむ 賢徳公  
今まで多く旅をしてきたばって 今度の旅（密会）は忘れるこたでけんどだ  
※「草枕」は、「結ぶ・旅」に掛かる枕詞

1151 思ふには 忍ぶることぞ まけにける 逢ふにしかへば さもあらばあれ 業平朝臣  
あなたを思う心は 人目を忍ばんばならんばってん  
もし逢えることができれば 後はどがんなくてもかまいません

1155 逢ふまでの 命もがなと 思ひしは くやしかりける わが心かな 西行法師  
もしご一緒できたら命が終わってもよかと 思うとったばって  
お会いできれば もっと生きて一緒にいたいと 思っている自分が悔しか

1158 中々に 物思ひそめて 寝ぬる夜は はかなき夢も えやは見えける 実方朝臣  
なまじっか恋の物思いで初めて寝る夜は 儚か夢を見ることすらもかなわんとヨ

1159 夢とても 人に語るな 知るといへば 手枕ならぬ 枕だにせず 伊勢  
例え 夢に見たとしても 人には言わんでよ  
私は二人の仲を知るといけん 枕ならぬ手枕さえ しとらんとじゃけん

1164 蘆の屋の しづはた帯の かた結び 心やすくも 打ち解くるかな 俊頼朝臣  
葦の家の<sup>しと</sup>倭文で織った帯の片結びのごて 心易う打ち解けてくるっどかね

1165 かりそめに ふしみの野邊の 草まくら 露かかりきと 人に語るな  
軽々しゅうちょっとでん 伏見の野原で私と旅寝して露がかかったなどと  
人に言うなぞ

※「草枕」は、「露・結ぶ・旅」に掛かる枕詞

1166 いかんせむ 葛のうら吹く 秋風に 下葉の露の かくれなき身を 相模  
どうしゅうろ 葛の裏葉を吹き<sup>ひるがえ</sup>翻す 秋風に下葉の露が顕れてしまうごて  
私たちの秘めた関係を 人に教えてしもうたりして

1171 はかなくも 明けにけるかな 朝露の おきての後ぞ 消えまさりける 延喜御歌  
あなたと過ごした夜も あっけなく明けてしもうて 起きた後も

草に付いた朝露が消えてでにゃ残るごて あなたへの想いも更に深うなりよる

- 1172 朝露の おきつる空も 思ほえず 消えかへりつる 心まどひに 更衣源周子  
起きた後 朝露を置いた空も うわん空で憶えとりません  
別れの悲しさで 心を喪失しとりましたけん
- 1176 みじか夜の のこりすくなく 更け行けば かねてもの憂き 有明の空 藤原清正  
夏の短か夜じゃって 二人でいる時間が少のうなっとる  
もうすぐ夜が明けて 有明の空になってしまおうとが辛く悲しか
- 1178 今朝はしも 歎きもすらむ いたづらに 春の夜ひと夜 夢をだに見て 和泉式部  
今朝は特に嘆いておんなさっど 春の夜の一夜を男女の交わりも持たでにゃ  
むなしゅう過ごしてしもたけん
- 1183 おきて見ば 袖のみぬれて いとどしく 草葉の玉の 数やまさらん 実方朝臣  
起きて見たりゃ 私の袖が涙で濡れとる 草の葉につく水滴の数より多うか
- 1185 面影の 忘らるまじき 別れかな 名残を人の 月にとどめて 西行法師  
あなたの面影を忘れることができん 今日の別ればい  
ただあなたの面影の名残を 月が留めてくれとるヨ
- 1186 又も來む 秋をたのむの 雁だにも なきてぞ歸る 春のあけぼの 攝政太政大臣  
秋には又来ると言う 雁も 春の曙の時期には鳴いて帰っとよ  
だから私もあなたの所へ又来るつもりばって 別れが辛く泣いて帰ります
- 1189 朝ぼらけ 置きつる霜の 消えかへり 暮まつ程の 袖を見せばや 花山院御歌  
朝が明け、起きて別れた頃 置いてあった霜が消えてしもうとったごて  
消沈して 夕暮れまで待つ間に 涙で濡れた袖を見せてあげたか
- 1191 待つ宵に 更けゆく鐘の 聲聞けば あかぬわかれの 鳥はものかは 小侍従  
あの人を待っていて夜が更けた 寺の鐘のもう来ない時を告げる音を聞くとは  
もう少し一緒にいたかと思ひながら 夜明けを告げる鶏の声を聞くのに比べ  
はるかに悲しかもんたい
- 1193 有明は おもひ出あれや 横雲の ただよはれつる しののめの空 西行法師  
有明の月には思い出がある 横雲が漂って別れをためらうごたる 明け方の空を
- 1194 大井川 みせきの水の わくらばに 今日とたのめし 暮にやはあらぬ 清原元輔  
大井川の堰の水が湧くごて 今日とはあの人と会う約束をしたけん  
日の暮るっとが待ち遠しか
- 1195 夕暮に 命かけたる かげろふの ありやあらずや 問ふもはかなし  
夕暮れまで命を繋いでいるカゲロウのごて 命がけで

夕暮れにお出でになるのを待っている私に 生きていいのか  
いないのか（家にいるのか？）と聞くと情けなか

- 1199 聞くやいかに うはの空なる 風だにも まつに音する 習ありとは 宮内卿  
お聞きですか 上空を吹く風でっちゃん 松に音を立てる習性があったに  
私はうわの空で 来ないあなたが訪れるのを 待とととヨ
- 1205 頼めぬに 君くやと待つ 宵の間の ふけゆかてただ 明けなましかば 西行法師  
あてもなかばって 君が来てくれるかと 待ととる宵は  
更けんで直ぐ明けて欲しかもんたい
- 1207 君こむと いひし夜ごとに 過ぎぬれば 頼まぬものの 恋ひつつぞふる 不詳  
君がまた来ようと おっしゃった夜が 幾夜も過ぎてしもうたけん  
あなたのことは あてにしないつもりばって それでもやっぱり  
あなたのことを恋しく思いながら過ごしとととヨ
- 1208 衣手に 山おろし吹きて 寒き夜を 君來まさずは 獨かも寝む 柿本人麿  
衣の袖に山おろしの風が吹いて とても寒い夜を あなたが来んとなら  
一人で寝ることになっとじゃろかい
- 1209 逢ふことは これや限の たびならむ 草のまくらも 霜枯れにけり 馬内侍  
お会いできるのは最後かも 一回限り旅のごたるふうじゃろう  
枕の代わりに 結んでいった草枕も もう霜に枯れてしもたばい
- 1212 世の常の 秋風ならば 荻の葉に そよとばかりの 音はしてまし 安法法師女  
秋になると風ですら たまには荻の葉にそよいで 音を立つるごて  
男女の常として 飽きが来たからといっても  
たまには訪れるもんばって 殿下は それすらしなさらんとですネ
- 1215 結び置きし 袂だに見ぬ 花薄 かるともかれじ 君しとはずは 權中納言敦忠  
結び置いた袂のごて見える 薄の穂でさえ 刈っても枯れんと  
君に問はずにはおられん
- 1220 偽を ただすのもりの ゆふだすき かけつつ誓へ われを思はば 平定文  
偽りを正すという 糺の森の神事の 木綿だすきではないが  
私のことを思っていると 神の木綿だすきを掛けて誓ってくだっせ
- 1223 ただ頼め たとへば人の いつはりを 重ねてこそは 又も恨みめ 前大僧正慈圓  
ただ信じてほしか 例えば私が偽りを重ねたとしたら 恨んでもかまわんけん
- 1225 たのめこし 言の葉ばかり 留め置きて 浅茅が露と 消えなましかば 不詳  
「私を頼りにしてください」と うれしかお言葉だけを形見に  
浅茅に置く露んごて消えてしもうたら 私を哀れと思うてくれらすどかね

- 1226 あはれにも 誰かは露を 思はまし 消え残るべき わが身ならねば 久我内大臣  
 あなたがはかなく死んだとしても 他の誰が少しでも哀れと思うもんですか  
 私自身は独りじゃ生きられんとですけん あなたの後を追うことでしょだ
- 1227 つらきをも 恨みぬわれに 習ふなよ うき身を知らぬ 人もこそあれ 小侍従  
 独りで居る辛さを恨まない私に 慣れないでください  
 自分自身が憂き身だということを 知らない人もおらすとだけん
- 1230 あはれとて 人の心の なさけあれな 数ならぬには よらぬ歎を 西行法師  
 可哀想だと あの人が同情してくれらっせばよかばって  
 ものの数にも入らん私じゃったっちゃ こがん恋の思いで悩んどっとだけん
- 1231 身を知れば 人の咎とも 思はぬに うらみ顔にも 濡るる袖かな 西行法師  
 自分自身を知っとるけん 恋が叶わんともあなたのせいとは思わんばって  
 あなたを恨むかのごて 涙が私の袖を濡れきゃあてしもた
- 1232 よしさらば後の世とだに頼めおけつらさに堪へぬ身ともこそなれ 皇太后宮大夫俊成  
 逢えんといとのなら しよんなか それなら来世では逢うと約束してくだっせ  
 つらさの為に耐えきらでにゃ 死んでしまうかもしれんけん
- 1233 頼めおかむ たださばかりを 契りにて うき世の中の 夢になしてよ 藤原定家朝臣母  
 来世では逢う約束しましょうだ ただそれだけしか約束できません  
 今までのつらかお気持ちは 憂き世での夢として私のことも忘れてくれネ

#### 巻第十四（恋歌四）

- 1234 宵々に 君をあはれと 思ひつつ 人にはいはで 音をのみぞ泣く 清愼公  
 毎夜逢えないあなたを 恋しく想いながら  
 人にも言わんで 声を立てて 泣いてばかりおります
- 1235 君だにも 思ひ出でける 宵々を 待つはいかなる こちかはする 不詳  
 つれないあなたさえも 私を思い出して頂いた夜々も  
 待っとる私は どがん気持ちじゃったか わからっさんど？
- 1236 戀しさに 死ぬる命を 思ひ出て 問ふ人あらば なしと答へよ 不詳  
 あなたへの恋しさで 死んでしまうとでしようけん  
 もし私を尋ねてくれる人がいたら もうこの世にはおらんと答えてください
- 1237 別れては 昨日今日こそ 隔てつれ 千世しも経たる 心地のみする 謙徳公  
 あなたと喧嘩別れしてから 昨日今日と二日しか経っとらんとに  
 逢えん時間が まるで千年もたったごて感じます
- 1238 昨日とも 今日とも知らず 今はとて 別れしままの 心まどひに 恵子女王

昨日なのか今日のことが 私にはわかりません  
別れの時の「二度と来ん」のお言葉に あまりに心が乱れてしても

- 1239 絶えぬるか 影だに見えれば 問ふべきを 形見の水は 水草みにけり 右大将道綱母  
あの人との関係は 絶えてしもうたっじゃろかい  
あの人姿が水に映って見えたら 聞いてみゅうばって  
水には水草が生えとったけん 影を映してはくれん
- 1240 方々に 引き別れつつ 菖蒲草 あらぬねをやは かけむと思ひし 陽明門院  
方々に引き分かれた 菖蒲草の根じゃなかばって  
泣く音を 袖に懸けることになろうとは 思ってもみんじゃった
- 1241 言の葉の 移ろふだにも あるものを いとど時雨の 降りまさるらむ 伊勢  
このカエデの葉のごて あなたの契った言葉も変わってしもうて  
今日の時雨が更に葉を散らしてしまい あなたも私を捨ててしまおうとじゃろう
- 1244 霜さやく 野辺の草葉に あらねども などが人目の かれまさるらん 延喜御歌  
霜があちらこちらに置かれて 枯れてくる野辺の草葉ではなかとに  
どいあなたは私から離れていってしもうたとネ
- 1245 浅茅おふる 野辺やかかるらん 山がつの 垣ほの草は 色もかはらず 不詳  
浅茅が生えている野辺の草が枯れて 色が変わるごて  
陛下も 他の女性へ心変わりなさったっじゃろばって  
垣根の大和撫子の草のごて 私は心変わりしておりません
- 1257 さらしなや <sup>おばすてやま</sup> 姨捨山の 有明の つきずも物を 思ふ頃かな 伊勢  
更級の姥捨山の 有明の月じゃなかばって  
月を見て 尽きせぬ物思いをしている今日この頃たい
- 1260 天の戸を おしあけがたの 月見れば 憂き人しもぞ 戀しかりける 不詳  
お日様が 天の戸を押し開けて出てくる頃の 明け方の月を見れば  
つれなかな人ばって あの人が恋しく思われる
- 1261 ほの見えし 月を戀しと 歸るさの 雲路の浪に 濡れて來しかな 不詳  
わずかに見える月を恋しかと 歸るその空の道の浪に 濡れてくるばい
- 1268 隈もなき 折りしも人を 思ひ出でて ころと月を やつしつるかな 西行法師  
曇りもなか月夜の折 ふと あの人を思い出して  
私の涙のせいで せっかくの月を 台無しにしてしもうた
- 1269 物思ひて 眺むる頃の 月の色に いかばかりなる あはれ添ふらむ 西行法師  
人生に悩みながら眺めた頃の月の色に  
どれくらいしみじみとした感傷があったろうかい

今は 本当の月の色に あわれを感じらるつとに

- 1270 曇れかし ながむるからに 悲しきは 月におぼゆる 人のおもかげ 八條院高倉  
曇ってくれ 月を見ていると悲しゅうなる 月影が恋人の面影を思い出す
- 1274 戀ひわぶる なみだや空に 曇るらむ 光もかはる ねやの月かけ 權中納言公經  
恋に苦惱しとる涙で空が曇るとる 月影の光も寢所にさすと変わって見ゆる
- 1276 いま來むと 契りしことは 夢ながら 見し夜に似たる ありあけの月 右衛門督通具  
またすぐ逢いに來ると約束したとは 夢のごて消えてしもうたばって  
前逢った夜に見た月と同じ 有明の月が出とるばい
- 1277 忘れじと いひしばかりの なごりとて その夜の月は 廻り來にけり 藤原有家朝臣  
あなたのことは忘れません また逢いにきますと約束したよね  
月だけは あの夜と同じく廻って また逢いにきてくれたとよ
- 1282 わくらばに 待ちつる宵も ふけにけり さやは契りし 山の端の月 攝政太政大臣  
たまたま 來るといので待っていたとに 宵も更けてしもうた  
清く約束した月も もう山の端に落ちてしもうた
- 1283 來ぬ人を 待つとはなくて 待つ宵の 更け行く空の 月もうらめし 藤原有家朝臣  
來ない恋人を 待つというじゃなかばって  
その人を思って 更け行く空の月もうらめしか
- 1284 松山と 契りし人は つれなくて 袖越す浪に のこる月かけ 藤原定家朝臣  
松山のマツではないが 待つと約束した人はつれなか  
袖の涙に月影が残るとるヨ
- 1295 忘れゆく 人ゆゑ空を ながむれば たえだえにこそ 雲もみえけれ 刑部卿範兼  
私を忘れてしまっている人を思って 空を眺めれば  
雲も途切れ途切れで 浮かんでいます あの人の心のごて
- 1297 疎くなる 人をなにとて 恨むらむ 知られず知らぬ 折もありしを 西行法師  
だんだん疎くなってきているあなたを どうして恨んでしまおうとじゃろかい  
あなたに会う以前は あなたは私を知ることもなく 私もあなたを知らんで  
安らかに過ごした時期もあったとに
- 1300 あはれなる 心の闇の ゆかりとも 見し夜の夢を たれかさだめむ 權中納言公經  
あなたと逢ったあの夜のはかない夢を  
心の迷いの闇の縁によるものだと 誰が言うことがでくっどか
- 1302 恨み侘び 待たじいまはの 身なれども 思ひなれにし 夕暮の空 寂蓮法師  
あの人が來ないことを恨みに思って待つのは 止みゅうと思ふ身なのですが

夕暮れの空を眺めながら 待つことに慣れてしもうたよ

- 1304 思ひかね うちぬる宵も ありなまし 吹きだにすさめ 庭の松風 攝政太政大臣  
想いかねて眠れん夜もあっとだけん 庭の松風よ 吹かんで静かに眠らせてくれ
- 1305 さらにだに 恨むと思ふ わぎも子が 衣のすそに 秋風ぞ吹く 藤原有家朝臣  
そうでなくとも恨もうとに思う 私の妻の衣の袖に秋風が吹いとる
- 1307 あはれとて とふ人のなど なかるらん 物思ふやどの 萩の上風 西行法師  
哀れだと思って 尋ねてくれる人も無い 一人家の中で  
物思いに沈んでいる私を尋ねてくるのは 秋の萩の上に吹く愁いの風だけ
- 1310 いつも聞く ものとや人の 思ふらむ 來ぬ夕暮の まつかぜの聲 攝政太政大臣  
いつも聞いている音だと あの人は思うどかい  
あの人が来ない 夕暮れの松風の音を
- 1311 心あらば 吹かずもあらなむ よひよひに 人待つ宿の 庭の松風 前大僧正慈圓  
私を哀れと思う心があったらば 庭の松風よ 吹かんでおくれ  
毎夜あの人が来てくれるかと 待とととだけん
- 1312 里は荒れぬ 空しき床の あたりまで 身はならはしの 秋風ぞ吹く 寂蓮法師  
あの人が訪ねて来んけん寂しか 私の家は 荒れてしもうた  
空しく一人寝の床の辺りまで 冷たく吹く秋風のごたる  
あの人に飽きられた生活にも この身は慣れてしもうた
- 1313 里は荒れぬ 尾上の宮の おのづから 待ち來し宵も 昔なりけり 太上天皇  
古か離宮のあった里も 自然に今は荒れ果てて  
後の宮が帝を待っていた宵も 昔となつてしもうた
- 1314 物思はで ただおほかたの 露にだに 濡るれば濡るる 秋の袂を 藤原有家朝臣  
物思いにふけず ただ普通の露にさえ 秋の袂はひどく濡るつとに  
ましてや物思いにふけつとれば 更に涙で濡れてしまいます
- 1315 草枕 結びさだめむ かた知らず ならはぬ野邊の 夢のかよひ路 藤原雅經  
草枕を結んであなたのいる方向に 枕を向けて寝ようと思いますが  
馴れないこの野原では わかりません  
夢の通り道で あなたに逢いに行きたかと思うとに  
※「草枕」は、「結ぶ・露・旅」に掛かる枕詞
- 1321 來ぬ人を あきのけしきや ふけぬらむ うらみによわる まつ虫の聲 寂蓮法師  
私の所に通って来ない人は もう私に飽きとるごたる  
私は恨みに思って 涙も涸れて弱ってしもうとります  
まるで秋も深まって 日々弱っていく 松虫の声のごて

- 1323 袖の露も あらぬ色にぞ 消えかへり 移ればかはる 歎きせしまに 太上天皇  
私の涙も あらぬ色になって消えとっどだ  
他の人にあの人が心が移って 忘れられた私との関係が変わって嘆いとる間に

## 巻第十五（恋歌五）

- 1336 白妙の 袖の別れに 露おちて 身にしむ色の 秋風ぞ吹く 藤原定家朝臣  
あなたとの別れで衣の袖に涙が落ちて 身に染みるごたる色が変わってしもうた  
ちょうど秋風が吹いて葉の色が変わるごて 私の心も愁いに沈んでいます  
※「白妙の」は、「袖・衣」に掛かる枕詞
- 1337 おもひいる 身はふかくさの 秋の露 たのめしす柔や 木枯の風 藤原家隆朝臣  
深い思いで嘆いている私は 深草の里に住んで 深草の露んごたる  
頼みにさせとって つれなくなった薄情なあの人は  
まるで露を散らす冷たか 木枯らしの風んごたるふう
- 1344 今來むと いふ言の葉も かれゆくに 夜な夜な露の 何に置くらむ 和泉式部  
今行きますよという あなたのことはも すいぶん時がたって枯れてきました  
夜な夜なあなたの返事を待っていて 私の涙をどこへ置けば良かつじゃろか
- 1349 君がせぬ わが手まくらは 草なれや 涙の露の 夜な夜なぞ置く 光孝天皇御歌  
あなたがしてくれない私の手枕の袖は 旅の一人寝の野の草じゃいろ  
涙の露に夜毎についてしまいます
- 11353 稻妻は 照さぬ宵も なかりけり いづらほのかに 見えしかげろふ 相模  
秋の稲妻が照らん夜は無かごて 同じく儂いほのかな陽炎と  
ちょっと影を見せただけで 来なくなってしもうたあの人は  
一体どけ行ってしもうたっじゃいろ
- 1357 おもほえず 袖に湊の 騒ぐかな もろこし舟の 寄りしばかりに 不詳  
あなたからの優しかことばに 思わず涙があふれてきて  
まるで湊に大きな唐舟が来て とても騒がしくなったごて動揺しとります
- 1358 妹が袖 わかれし日より 白たへの ころもかたしき 戀ひつつぞ寝る 不詳  
妻の袖と別れた日より 衣を片方だけ敷いて 恋しく想いながら寝とります
- 1361 忘るらむと おもふこころの 疑に ありしよりけに ものぞ悲しき 不詳  
私のことを忘れてしもうたのではないかと 疑っている自分に気づいて  
前よりも一層悲しゅうなっしもうた
- 1362 憂きながら 人をばえしも 忘れねば かつ恨みつつ なほぞ戀しき 不詳  
辛いことですが あなたのことがどうしても忘れられんけん  
一方では恨みながら 一方ではやはり恋しゅう 思うとっどですよ

- 1365 今までに 忘れぬ人は 世にもあらし おのがさまざま 年の経ぬれば 不詳  
今までに昔のことを忘れてしもうた人もいないし 私もあなたとのことを  
忘れてしもうたわけじゃなかばって それぞれお互い  
様々な年月を過ごしてきたので 昔んごて付き合うこたできません
- 1366 玉水を 手にむすびても 試みむ ぬるくば石の なかもたのまじ 不詳  
玉のごたる清水でも 手ですくってみゅう もしぬるかとなろば  
例え 石の中からわき出しても あてにはならんけん  
あなたの表向きの誠意も あてになるか 試してみんばわからん
- 1367 山城の 井手の玉水 手に汲みて たのみしかひも なき世なりけり 不詳  
山城の井手の美しか水を手ですくうて手で飲むごて頼み甲斐もなか世の中だ
- 1368 君があたり 見つつを居らむ 伊駒山 雲なかくしそ 雨は降るとも 不詳  
あの人がいる大和の国の方をみていたかけん 生駒山を雲で隠さんでくれ  
例え雨が降ったとしても
- 1369 中空に 立ちぬ雲の 跡もなく 身のはかなくも なりぬべきかな 不詳  
中空に立っとる雲が あとかたもなく消えてしまうごて この私も  
あなたから疑われとっとなら 行き場もなく 頼りのなか身の上  
になってしもうたことです
- 1371 晝は来て 夜はわかるる 山鳥の かげ見るときぞ 音は泣かれける 不詳  
晝は逢うて 夜は別れて眠る山鳥の姿をみれば その定めのごて  
会うだけで契ることができん身の上に 思わず声を出して泣いてしまうとヨ
- 1372 われもしか なきてそ人に 戀ひられし 今こそよそに 聲をのみ聞け 不詳  
私もかつてあの牡鹿のごて あなたに求愛されておりましたが  
今では隣の部屋の方に 妻問う声しか聞こえまっせん
- 1373 夏野行く をじかの角の つかのまも わすれず思へ 妹がころを 柿本人麿  
毎年生え替わるため 夏野に行く牡鹿の短い角のごて  
つかの間の短い間も忘れずに思うとります お前が私を思っている心を
- 1374 夏草の 露わけごろも 着もせぬに などわが袖の かわくときなき 柿本人麿  
夏草の露に濡れた衣も 着とるわけではなかとに  
私の衣の袖は 叶わぬ恋の涙で 乾く時がありません
- 1375 みそぎする ならの小川の 川風に 祈りぞわたる 下に絶えじと 八代女王  
禊ぎをする 櫓の小川の川風の中で お祈りしながら渡ってくだっせ  
あなたとの仲が知られんまま 命が絶えんごて ちゅて

- 1377 あしべより 満ち来る汐の いやましに 思ふか君が 忘れかねつる 山口女王  
葦の生えとる海辺から 満ちてくる潮んごて  
あなたを思う心が 徐々に増えて 忘れられんごてなってきました
- 1378 鹽竈の まへに浮きたる 浮島の うきておもひの ある世なりけり 山口女王  
塩釜の前に浮いている浮島のごて 寄る辺もなく漂うだけで  
憂いの思いばかりの世の中ですね
- 1381 春の夜の 夢にありつと 見えつれば 思ひ絶えにし 人ぞ待たるる 伊勢  
春の夜の夢の中に あの人が出て来て もうあきらめてしもうたに  
もしかしたら 又逢いに来てくれらすどと 待ってしまいます
- 1382 春の夜の 夢のしるしは つらくとも 見しばかりだに あらば頼まむ 盛明親王  
春の夜の夢の中で あの人は私に 冷淡にしとらしたばって  
もしそれが次ぎに逢う予兆で 夢に出てきた程度の辛さなら それを頼みにしゅう
- 1383 ぬる夢に うつつの憂さも 忘られて 思ひ慰む ほどぞはかなき 女御徽子女王  
お会いできない陛下の夢を見て 現実の憂さも 忘れられ  
思いも慰められとるごて 悲しかことはありません
- 1390 夢ぞとよ 見し面影も 契りしも 忘れずながら うつつならねば 皇太后宮大夫俊成女  
あれは夢じゃなかったっじゃろかいと 思っとります  
見たあの人の面影も 取り交わした約束も 忘れとらんとに  
現実にはあの人は 逢いに来てくれらっさんとだけん
- 1391 はかなくぞ 知らぬ命を 歎きこし わがかね言の かかりける世に 式子内親王  
おろかにも恋の途中で いつ死ぬか分らんと嘆いてきました  
私達が変わるまいと誓った約束ですら 破られ心変わりした世の中じゃって
- 1397 花咲かぬ 朽木の<sup>そま</sup> 杣の 杣人の いかなるくれに おもひいづらむ 藤原仲文  
もう花も咲かんごてなった朽ち木ばかりの杣山に住んどる  
うだつの上がらん 木こりの<sup>くれ</sup>ごたる私に とい 突然夕暮に思い出したごて  
皮の付いた木材である 樽が欲しいと言ってきたっですか
- 1399 習わねば 人の問はぬも つらからで 悔しきにこそ 袖は濡れけれ 前中納言教盛母  
恨みに慣れておりませんけん あなたが訪れんでも 辛くはありませんでした  
ただあなたのような薄情な人に 従った悔し涙で 濡れていました
- 1400 歎かじな 思へば人に つらかりし この世ながらの 報なりけり 皇嘉門院尾張  
どうぞ歎かんで下さい 思えば人の世は辛いことばかりですし  
この世の辛いことは 前世での報いですけん
- 1401 いかにして いかはこの世に ありへばか 暫しも物を 思はざるべき 和泉式部

どがんしてどどがん具合で この世を生きて過ごすなら ほんの少しの間でん  
あの人の事を思って 悩んでいることがでくっでしようか

- 1402 嬉しくば 忘るることも ありなまし つらきぞ長き 形見なりける 清原深養父  
うれしかことなら 忘れる事もあろばって 辛かことは  
長いこと忘れない 形見のごたるもんで なかなか忘れられんもんばい
- 1404 我身こそ あらぬかとのみ たどらるれ 問ふべき人に 忘れしより 小野小町  
私自身こそ ご存命かとだけ 聞かれとります  
本当に安否を問うべき人に 忘れられてから
- 1408 出でていにし 跡だにいまだ 變らぬに 誰が通路と 今はなるらむ 在原業平朝臣  
私が出て行って間もなく まだ道の様子も変わっとらんとに  
今は誰か外の男が通っととですか
- 1409 梅の花 香をのみ袖に とどめ置きて わが思ふ人は 音づれもせぬ 在原業平朝臣  
梅の花の咲く頃 おいでになってから その香りの思い出だけを  
私の袖に残して 私が思っている人は 訪ねてもくれらっさん
- 1410 天の原 そことも知らぬ 大空に おぼつかなさを 歎きつるかな 天曆御歌  
死んだ後に行く高天原が 空のどこにあるか知らんばって  
あなたに会えんけん 心が消えているごて さまようて嘆いてばかりおります
- 1411 なげくらむ 心を空に 見てしがな 立つ朝霧に 身をやなさまし 女御徽子女王  
陛下のお嘆きが真実なら 明朝すぐにでも参内しまっしょう  
私の嘆きが霧となって 雲居(宮中)まで 昇って行くことができますけん
- 1416 春行きて 秋までとやは 思ひけむ かりにはあらず 契りしものを 天曆御歌  
春が去って秋になるまで 里下がりするとは思わんじゃったばって  
そがん雁のごたる 仮の関係となったわけではなかでしように
- 1420 水の上の はかなき數も おもほえず 深き心し そこにとまれば 天曆御歌  
水の上に数を書くごたる 甲斐のなか片思いも今は嘆きません  
私の深い思いが あなたの心の底に留まっとるけん
- 1424 數ならば かからましやは 世の中に いと悲しきは 賤のをだまき 参議篁  
私がつるにたらない者だけん 世の中ではあなたとの仲を裂かるっとじゃるか  
とても悲しかとは 身分の低っか男だということ
- 1426 わがよはひ 衰へゆけば 白たへの 袖の馴れにし 君をしぞおもふ 不詳  
私も歳とって衰えてきたけん 着古した服の袖のごたる  
古女房のお前が 恋しくなってきたよ

- 1427 今よりは 逢はじとすれや 白たへの わがころも手の 乾く時なき 不詳  
暫くお見えにならず これから もう逢いに来てくれんというじゃろうか  
私の袖は涙で乾く時がありません
- 1428 玉くしげ あけまく惜しき あたら世を 衣手かれて 獨かも寝む 不詳  
明けてゆくのがもったいなかごたる良か夜に お前と遠く離れて  
一人で寝んばんとじゃろかい  
※「玉櫛笥」は、「あく・ふた・箱」に掛かる枕詞
- 1430 秋の田の 穂むけの風の かたよりに われは物思ふ つれなきものを 不詳  
秋の田の稲穂が一方になびくごて 私はあなたをひたすら思うとつとに  
あなたは 私など見向きもさっさん
- 1433 白波は 立ち騒ぐとも こりすまの 浦のみるめは 刈らむとぞ思ふ 不詳  
白波が立つごて 周りの世間が騒いで 邪魔しようとしたっちゃ  
懲りでにゃ あなたに逢いに行きます
- 1434 さして行く かたはみなとの 浪高み うらみてかへる 海人の釣舟 不詳  
港の波が高こうして 漕ぎ寄することができんごて あなたの家は  
逢うことを許してくれんけん 浦を見て帰る釣り舟んごて 恨みながら帰ります

 [トップページへ戻る](#)